平安・鎌倉時代における「現ス」「アラハス」「アラハル」についての一考察

柚木靖史

目次

一、はじめに
二、「現ス」「アラハス」「アラハル」の意味的関係
　1、「現ス」「アラハス」「アラハル」の用例数
　2、「現ス」「アラハス」「アラハル」の文法的諸特徴
　3、「現ス」「アラハス」「アラハル」と「カクス」「シノブ」
　4、主語と対象の観点からの考察
　5、「現ス」「アラハス」「アラハル」の意味
三、おわりに

一、はじめに

漢語サ変動詞に関する重要な研究課題の一つとして、漢語が日本語の中でどのように意味用法上の機能を果たしてきたかを解明するということが挙げられる。この観点からの研究は、近年、諸氏によって様々な論考がなされ、成果を挙げつつある。(1) 私も、「念ス」や「誦ス」に関して拙稿を提出させていただいたが、(2) 個々の語に関して未だ多くの問題点が残されているのが現状である。従って、本稿では新たに漢語サ変動詞「現ス」を取り上げ、類義の和語動詞「アラハス」

「アラハル」と比較することにより、「現ス」の意味用法を解明することとする。

今昔物語集における「現ス」「アラハス」「アラハル」の意味に関しては、すでに岩下裕一氏の論考がある。[3] その中で、岩下氏は、三語の意味を次のように結論づけられている。

○「アラハス」―「客観的に認められるようにする。」

○「現ズ」―「通常見られぬものを見せる。／（個人の）目に見える。／臨時にある形をとる。」

○「アラハル」―「客観的に認められるようになる。」

しかし、右掲の岩下氏の論考は今昔物語集のみを対象としたものであり、従って他の多くの文献を検索し、より多くの用例に基づいて、「現ス」の意味用法を記述することが、尚課題として残されていると考える。さらに、岩下氏は論文の冒頭で「『現ズ』が、「ゲンズ」か「アラハス」か不明の場合も考えられるが、作業として日本古典文学大系本の振仮名に従って整理していくこととする。」とされているが、このような読み方の不明な例については、慎重に取り扱う必要があろう。従って、本稿では、読み方の判ぜられない例は除外して、考察を進めることとした。[4]

これらの問題点を考慮に入れて、以下、主語と対象の観点からの考察を中心に、三語の意味的関係を解明していくこととする。

二、「現ス」「アラハス」「アラハル」の意味的関係

1、「現ス」「アラハス」「アラハル」の用例数

平安・鎌倉時代の国語文中に認められる三語の用例数を、作品の種類別に示すと表1のようになる。

表1　「現ス」「アラハス」「アラハル」の用例数

①和歌・歌謡

作品名	用例数		
	現ス	アラハス	アラハル
古今和歌集	0	0	3
後撰和歌集	0	0	1
拾遺和歌集	0	0	2
後拾遺和歌集	0	0	3
金葉和歌集	0	0	1

作品名	用例数		
	現ス	アラハス	アラハル
詞花和歌集	0	1	3
千載和歌集	0	1	5
新古今和歌集	0	1	1
梁塵秘抄	4	0	0

②物語

作品名	用例数		
	現ス	アラハス	アラハル
竹取物語	0	0	0
伊勢物語	0	0	0
大和物語	0	0	1
平中物語	0	0	1
宇津保物語	2	4	9
落窪物語	0	0	1

作品名	用例数		
	現ス	アラハス	アラハル
源氏物語	0	47	26
栄華物語	4	6	19
浜松中納言物語	0	4	5
狭衣物語	0	16	8
堤中納言物語	0	0	0

③日記・紀行

作品名	用例数		
	現ス	アラハス	アラハル
土左日記	0	0	0
蜻蛉日記	0	2	1
更級日記	0	0	1
紫式部日記	0	0	0
たまきはる	0	0	1

作品名	用例数		
	現ス	アラハス	アラハル
海道記	0	2	7
東関紀行	0	0	4
うたたね	0	0	0
十六夜日記	0	0	1
とはずがたり	1	2	3

④随筆

作品名	用例数		
	現ス	アラハス	アラハル
枕草子	0	3	6
徒然草	0	2	5

作品名	用例数		
	現ス	アラハス	アラハル
方丈記	0	0	0

⑤軍記物語

作品名	用例数		
	現ス	アラハス	アラハル
保元物語	1	5	5
平治物語	0	2	1

作品名	用例数		
	現ス	アラハス	アラハル
覚一本平家物語	11	11	22

⑥説話

作品名	用例数		
	現ス	アラハス	アラハル
三宝絵詞（観智院本）	0	28	9
宇治拾遺物語	3	9	3

⑦法語

作品名	用例数			作品名	用例数		
	現ス	アラハス	アラハル		現ス	アラハス	アラハル
唯信鈔（西本願寺本）	2	4	1	光言句義釈聴集記	5	5	4
西方指南抄	38	5	7	明恵上人夢記	0	1	1
一念多念文意	0	11	1	却廃忘記	0	1	0

（尚、西方指南抄には「現シ」表記が四例、光言句義釈聴集記には「現ス」表記が三例、明恵上人夢記には「現」表記が二例「現セリ」表記が一例、却廃忘記には「現シ」表記が一例「現」表記が一例認められる。これらの表記は、「ゲンス」と読むか「アラハス」と読むかが、現時点では判断できていないので、用例数から除外した。）

表1から看取されることをまとめると、次のようになる。

(a) 「現ス」は、和歌類・物語類・日記類・随筆類には出現しにくい傾向にあり、軍記物語類・説話類・法語類・歌謡類には比較的多くの用例を認めることができる。物語類では、他の作品に比べて語彙量の多い源氏物語や枕草子に、「現ス」の用例が一例も見いだせないことは注目される。このように、「現ス」は、和文中では使用されにくい語であると考えられる。

(b) 和語動詞「アラハス」「アラハル」はどちらも各文献群に亘って出現する。また、二語の出現状況には時代差や、作品の種類による差異は認められない。

2、「現ス」「アラハス」「アラハル」の文法的諸特徴

(1) 構文的特徴

ここでは、「現ス」「アラハス」「アラハル」について、それぞれどのような助詞に承接するかという観点から比較することとする。

まず、「現ス」は、次に示す用例①のように格助詞ヲに承接して、所謂他動詞的に使用される場合と、用例②のようにヲに承接することなく所謂自動詞的に使用される場合とが存する。

①「平家物語」上149頁10行
・無実の罪によって遠流の重科をかうぶる事を、天道あはれみ給て、九曜のかたちを現じつゝ、一行阿闍梨をまもり給。

②「平家物語」下334頁1行
・「是は八幡大菩薩の現じ給へるにこそ」とよろこで、

次に、「アラハス」は、用例③のように格助詞ヲに承接して、所謂他動詞的に使用される。用例④は、文面上はヲに承接していないが、文意としてはヲ格が想定される例である。

③「平家物語」上241頁6行
・枝葉連続して、親を顕し名を揚げむ事かたし。

④「源氏物語」さか木　377頁2行目

・いまぞやおらかほひきかくしてとかうまぎらはす。あさましうめざましう心やましけれどひたをもてにはいかでかあらはしたまはむ。

また、「アラハル」は、用例⑤のようにヲには承接せず、所謂自動詞的に使用される。

⑤「平家物語」上163頁7行

・盛者必衰の理は目前にこそ顕れけれ。

このように、「現ス」には、ヲに承接する場合と承接しない場合との二つの用法が存する。これに対して、「アラハス」は、ヲに承接する用法のみであり、「アラハル」は、ヲに承接しない用例のみである。従って、「現ス」「アラハス」「アラハル」には、互いに構文上の差異が存する。そこで、以下の考察は、三語の構文上の差異を考慮に入れて進めていくこととする。

（2）複合動詞形成上の特徴

ここでは、「現ス」「アラハス」「アラハル」三語について、複合動詞形成上の観点から比較することとする。

まず、「現ス」は、管見に入った限りでは、複合動詞となった例は認められない。これに対して、「アラハス」「アラハル」には、次のような複合動詞の例が存する。

(1)「アラハス」を含む複合動詞

・ミアラハス（源氏）（栄華）（十訓）・カキアラハス（源氏）（栄華）（平家）・トヒアラハス（源氏）・キキアラハス（源氏）（浜松）・キコエアラハス（源氏）・イヒアラハス（源氏）（枕）・マウシアラハス（とはず）・ヒキアラハス（枕）・ホエアラハス（十訓）・フキアラハス（十訓）・シメシアラハス（三宝）・ノベアラハス（三宝）・アラハシマウス（源氏）・アラハシノタマフ（源氏）・アラハシシメス（三宝）・アラハシウ（三宝）

(2)「アラハル」を含む複合動詞

・オモヒアラハル（栄華）（三宝）・サシアラハル（保元）・キタリアラハル（三宝）・アラハレイヅ（浜松）（平家）・アラハレワタル（東関）

右に示すように、「アラハス」「アラハル」は、多種の複合動詞を形成している。この点は、漢語サ変動詞「現ス」に複合動詞の例が一例もないことと比して、特徴的な事象である。また、「アラハス」には、「トヒアラハス」「マウシアラハス」「ノベアラハス」「アラハシマウス」「アラハシノタマフ」のように、言語行為に関わる語と結びついた複合動詞が認められ、「アラハル」には、「オモヒアラハル」のように、思考に関わる語と結びついた複合動詞が認められる。このうち、言語行為に関わる語と結びついた「アラハス」は、「言葉で表現する」といった意味を示すと考えられ、思考に関わる語と結びついた「アラハル」は、「頭のなかに形象を思い描く」といった意味を示すと考えられる。以下、「現ス」の意味を検討するうえで、「アラハス」「アラハル」のこのような意味が「現ス」にも認められるか否かということが、重要な視点となる。

3、「現ス」「アラハス」「アラハル」と「カクス」「シノブ」

「アラハス」や「アラハル」が使用されている同一文中もしくは周辺の文中において、しばしば認められる語に「カクス」と「シノブ」という語がある。この二語は、「現ス」とともには使用されていないようである。従って、ここでは「アラハス」「アラハル」の意味を、「カクス」「シノブ」の二語と関連させて考えることとする。

(1)「アラハス」と「カクス」が同一文中に使用された例

①「浜松中納言物語」203頁9行

・はじめよりのありさま細かにかたり出でたるに、かばかりに隠したらんに、わが世の人ならば、今になりてかくあらはし出でざらましを、

②「十訓抄」巻四115頁9行

・云マシキ事ヲ口トク云出シ、人ノ短ヲソシリ、シタル事ヲ難シ、カクス事ヲ顕シ、恥カマシキ事ヲタ、ス。

(2)「アラハル」と「シノブ」が近接の文中に使用された例

③「源氏物語」(うす雲623頁9行)〔他に1142頁4行、1303頁11行に類例あり〕

・さま〳〵のふみどもを御らんずるにもろこしには、あらはれてもしのびてもみだりがはしき事いとおほかりけり。

④「浜松中納言物語」304頁9行

・「いみじう心憂き御心なり。かく忍びてや、ともかくも御覧ぜられん。うちあらはれては、よし見給へよ。」

右のうち、①②の例は、いずれも「アラハス」が「カクス」と対義的に使用されている。「カクス」には、「物を人から見えないようにする」「事件を人に知られないようにする」といった意味があると考えられるが、ここでの「カクス」の意味は、そのうちの後者の方の意味で使用されたものである。また、③④の例は、いずれも「アラハル」が、「シノブ」と対義的に使用された例である。「シノブ」には、「人に見えないように隠れている」といった意味があると考えられる。このように、「カクス」「シノブ」にはいずれも、「人に見えないようにする(なる)」という意味があり、一方、「アラハス」「アラハル」にはこれらの語とは対義の、「人に見えるようにする(なる)」という意味が存するものと考えられる。「カクス」「シノブ」には、「可視的なものを見えないようにする」という意味だけではなく、「事件を隠す」「心のうちを隠す」といった「不可視的なものを人に知られないようにする」という意味も存する。用例①②③に認められる「カクス」「シノブ」は、この意味で使用された例である。「アラハス」「アラハル」が、このような「不可視的なものを人に知られないようにする」という意味を示す「カクス」や「シノブ」とともに使用され、対義的な意味を示していることは、「アラハス」「アラハル」の意味を考える上で注目してよいであろう。

4、主語と対象の観点からの考察

「現ス」「アラハス」「アラハル」それぞれの語の意味を記述し、三語の意味的関係を明らかにするためには、主語・対象の比較による分析方法をとることが最も有効であると考えられるので、[5]以下この観点からの考察を行うこととする。

(1)「現ス」「アラハス」「アラハル」の主語について

「現ス」「アラハス」「アラハル」の主語を文献ごとに表にすると表2のようになる。

(1)「現ス」の主語

ここで、表2に示した「現ス」の主語を、数の多い順に示すと次のようになる。

①格助詞ヲに続かない場合

○神佛―佛（菩薩／観音）（15）神（大明神／神の駆者）（3）多聞／持国（1）十羅刹女（1）○人間―人（3）僧（従僧／下僧）（2）将門（1）○仏教的概念―［相］瑠璃宮ノ殿相（3）賢善精進ノ相（2）火車ノ相（1）証相（1）死相（1）・［観］地想観（3）・功徳（1）○形―功徳ノ形（2）相好（1）牛馬ノ形（1）佛ノ形（1）○自然物―宝樹（1）紫雲（1）光（1）○大車と佛と菩薩と僧（1）○童子と従僧（1）

②格助詞ヲに続く場合

○神佛―佛（15）神（2）天（浄居天／天道）（2）明王（1）○人間―人（2）僧（大士／聖人）（2）○仏教的概念―佛智（1）

右のように、「現ス」の主語のうち最も多い語は、「神佛」である。この「神佛」が主語となる数は、「現ス」が格助詞ヲに続く場合と、格助詞ヲに続かない場合とのいずれに於いても最も多くなっている。また、「現ス」の主語としては、人間のような有情物と自然物のような無情物とが存し、有情物・無情物に関らずいずれも主語となり得ることが分かる。

表2　「現ス」「アラハス」「アラハル」の主語

①和歌・歌謡

作品	現ス	アラハス	アラハル
古今和歌集			二人の関係・心・をしどり
後撰和歌集			あしのね
拾遺和歌集			心(2)
後拾遺和歌集			たもと・かくれぬの・衣の玉
金葉和歌集			心
詞花和歌集		我	桜・雲雀のとこ・神のしるし
千載和歌集		我	玉がし・袖・もしほ草・君が名・網代木
新古今和歌集		むもれ水	忍草
梁塵秘抄	菩薩・観音・神の駆者・神		

②物語

作品	現ス	アラハス	アラハル
大和物語			我(和歌中)
平中物語			我(和歌中)
宇津保物語	佛(3)	人(3)・佛	本尊・佛(2)・我・根(和歌中)・心ざし・神(和歌中) ※他に副詞的用法一例あり

落窪物語			隠していたこと
源氏物語		人(45)・佛・木霊	物の怪(6)・神佛(2)・心ばへ(2)・心くるしさ・御おぼえ・人の才・わろきおぼえ・御ありき・しるし・寺の験・心のしるし・びんなきふるまひ・数ならぬ身のほど・事件・根(和歌中)・袖の雫(和歌中) ※他に副詞的用法三例あり
栄華物語	佛(3)・浄居天	人(6)	佛(12)・船(2)・観音・姿・僧都・袂・佛神の御しるし ※他に副詞的用法一例あり
浜松中納言物語		人(3)	佛(2)・心・隠し事・姿
狭衣物語		人(8)	佛(5)・神(2)・天照大神の御けはひ・隠し事

③日記・紀行

作品	現ス	アラハス	アラハル
蜻蛉日記		人(2)	根(和歌中)
更級日記			神
たまきはる			御けしき

海道記		人・松の風	月(2)・山・牛漢・心・父母(如来の姿として)・善根
東関紀行			湖・沖の石・烏瑟・海の面
十六夜日記			月の影
とはずがたり	朝敵の人々	人(2)	明神・鏡の精・隠し事

④随筆

作品	現ス	アラハス	アラハル
枕草子			顔(2)・佛(2)・神 ※他に副詞的用法一例あり
徒然草		人(2)	嘘(2)・心・木霊

⑤軍記物語

作品	現ス	アラハス	アラハル
保元物語	将門	釈迦(2)・人・毘沙門天・大和の声聞	善根・天照大神・現業・人
平治物語		人(2)	諸行無常
覚一本平家物語	大明神(3)・人・天道・施無畏者の大士・多聞／持国・十羅刹女・二人の童子／二人の従僧／十人の下僧／七宝の大車・佛・八幡大菩薩・僧	峯の高さ・沙羅双樹の花の色・佛・僧	隠し事(3)・心(3)・怨霊(2)・謀反(2)・月(2)・桜・盛者必衰の理・継目・霊鳩・三毒四慢・烏瑟・文字・明神・観音の霊像・色(和歌中)

⑥説話

作品	現ス	アラハス	アラハル
三宝絵詞(観智院本)		人(25)・孔雀王・四天王・帝釈	佛(3)・明星(2)・佛ノ位・菩薩・鷲・聖
宇治拾遺物語	人・佛・明王	人(4)・犬・狸	佛・陰謀・月
閑居友		人(5)	化佛・観音・佛性

⑦法語

作品	現ス	アラハス	アラハル
唯心鈔(西本願寺本)	火車の相・佛	人(4)	後生ノ苦シミ
西方指南抄	佛(20)・瑠璃宮ノ殿相(4)・地想(3)・賢善精進ノ相(2)・紫雲・五色ノ光・瑠璃ノ相・瑠璃地・証相・死相・宝樹・相好・聖人	人(2)・佛ノ功徳(2)・佛・山川渓谷草木樹林	佛ノ功徳(2)・経ノ心・法界ニ遍スル相・大慈大悲ノ誓願・佛ノ因果／惣門ノ一切ノ万徳・念佛ノ一行証誠スル宗
一念多念文意		佛・躍・当知此人・法則・文・誓願・経・御念・十念三念五念ノモノモムカヘタマフトイフハ	欲／怒／腹立／ソネミ／ネタム心
光言句義釈聴集記	功徳ノ形(2)・牛馬ノ形・佛ノ形・功徳	人・真言・真言ノ名字・佛法・教	我体(2)・不生ノ性・不思議ノ心性
明恵上人夢記		決定ノ占法	土
却廃忘記		人	

また、「童子と従僧」のように主語が複数の場合もある。ここで注目されることは、「現ス」の主語には、「神佛」「僧」「相」「観」といった仏教の教義と深く関わる語が多く認められることである。また、これらの主語は、全て可視的な具象物であるという特徴も有している。ここで、具体例を示しながら、個々の例について更に検討を加えることとする。

(a)人間を主語にとる例

①「保元物語」125頁6行

将門弓箭を帯して、炉壇の炎の上に現ず。

(右の例は、僧の祈禱によって将門の姿が炉壇の炎の上に現われた場面である。従って、この場合の将門は、実際の人物ではない。僧の祈禱という内容であるから、仏教的な場面である。)

②「平家物語」上120頁6行

「既に十二三にならむずる者が、今は礼儀を存知してこそふるまうべきに、か様に尾籠を現じて、入道の悪名をたつ。」

(右の例は、平資盛の無礼を小松殿が非難する場面である。主語は平資盛であり、対象は尾籠である。従って、仏教とは無関係な場面である。)

③「とはずがたり」II 3オ10

「むかしのてうてきの人々も、これ程のふしぎはげんぜず侯。」

(主語は、昔の朝敵であり、対象は不思議すなわち狼籍である。従って、仏教とは無関係な場面である。)

(b)自然物を主語にとる例(光が主語の例)

④「西方指南抄」上末55頁1行

終ノトキ白雲西方ヨリ来テ三道ノ白光ト成テ房中ヲ照ス　五色ノ光空中ニ現ス　又墓ノ上ニ紫雲三度現スル事

アリ

（右の例は道綽禅師の終焉の場面である。従って、仏教的な場面である。）

(c)形を主語にとる例

⑤「光言句義釈聴集記」上122行

何ニ物モ其ノ形木ヲオセハ其ノカタチ現スルヲ印ト云

（右の例は、手印について述べた場面である。従って、仏教的な場面である。）

右に示した用例のうち、まず、人間を主語にとる例①②③について検討する。①は仏教的な場面で使用されたものであり、②③は仏教とは無関係な場面で使用されたものである。このうち①は主語が将門となってはいるが、文意は「別の所にいる将門が祈禱によって炉壇の上に出てきて姿が見えるようになる」ということであり、「将門本人が実際に人々の眼前に登場した」という意ではない。従って、①の主語は、純粋に人間とは考えられないのであり、「神佛」の類に属する例に準じて考えることもできるのである。これに対して、②③は、主語に人間をとる例である。但し、②③の文意は、「人間が狼籍を働いて、それが世間に知られるところとなる」であり、実際に現れるのは「狼籍」であって、「人間の姿」ではない。これら②③の例は、「現ス」がヲ格に承接する構文であり、「現ス」が所謂他動詞的に使用されているために、主語は人間であっても、実際に現れるのは対象の狼籍の方となるのである。これらのことから、「現ス」が人間を主語にとり、「姿が眼前に見えるようになる」という意味で使用された例は、管見に入る限りでは認められないことになる。このことは、後に「アラハス」「アラハル」との比較において重要な視点となる。

さて、ここで「現ス」が、仏教的な場面で使用されるか否かという点に着目すれば、②③の例の他は全て仏教的な場面で使用されていることになる。この点は、用例として掲げなかった全ての例について言える特徴である。つまり、「現ス」の意味は、本来、仏教と深く関わると考えられるのである。従って、②③の例は、「現ス」の意味用法としては、特

殊であるといっても大過なかろう。さらに言えば、②③の例はいずれも、時代的には鎌倉時代以降の文献に使用されており、いずれも会話文中に使用されているという特徴も有する。これらのことから、尚慎重を期さなければならないが、「現ス」の本来の意味用法は、本来、仏教の教義と深く関わるものであり、且つ「生身の人間」を主語に取り得なかったのであって、②③の「現ス」は派生的な意味用法として捉えることができると考えられるのである。

次に、自然物や形を主語にとる例④⑤について検討する。まず、これらの例は、いずれも仏教的な場面で使用されている。このことは、先に指摘したように、②③の例を除いた「現ス」の他の全用例についても言えることである。また、「現ス」の意味としては、④⑤いずれも「物の形が見えるようになる」であり、①の例の主語が人間であるのに対して、④⑤の例の主語は自然物や形といった無情物であるという違いこそあるが、①④⑤の「現ス」の意味は「形が見えるようになる」という点で略同じであると考えてよいものである。このように、「現ス」の意味は、「見えるようになる」という視覚的な意義特徴を有していると考えられるのである。

(2)「アラハス」の主語

「アラハス」の主語を、数の多い順に示すと次のようになる。

○人間（135）○仏教的概念―功徳（2）躍（1）当知此人（1）法則（1）文（1）誓願（1）経（1）御念（1）十念三念五念ノモノモムカヘタマフトイフハ（1）真言（1）真言の名字（1）佛法（1）教（1）決定ノ占法（1）○神佛―佛（5）釈迦（2）孔雀王（1）四天王（1）帝釈（1）毘沙門天（1）○自然物―水（1）松の風（1）峯の高さ（1）花の色（1）山川溪谷草木樹林（1）○動物―犬（3）狸（1）○霊―木霊（1）

右のように、「アラハス」の主語のうち、数が最も多いのは「人間」であり、他の主語と比べて数量的に大きな差が認められる。また、「アラハス」の主語は、人間のような有情物をとる場合と物品のような無情物をとる場合とが存する。この点は、「現ス」の主語が本来人間をとらないことに比して、大きく異なる特徴である。これらの主語がどのような対

象とともに使用されているかについては、次の項で述べることとし、次に、「現ス」の主語と共通する場合と共通しない場合とに分けて、具体例を掲げて考察することとする。（ここで「アラハス」と比較するためにとりあげる「現ス」は、「アラハス」と同様にヲ格をとるものに限ることとする。）

○「現ス」と「アラハス」とに共通する主語―神佛・仏教的概念・自然物

①「平家物語」下70頁13行（神佛〈この場合は佛〉が主語の例）

・帰命頂礼、八幡大菩薩は日域朝廷の本主、累世明君の嚢祖也。寶祚を守らんがため、蒼生を利せんがために、三身の金容をあらはし、三所の権扉をおしひらき給へり。

②「一念多念文意」46頁1行（仏教的概念〈この場合は躍〉が主語の例）

・躍ハ地ニオトルトイフヨロコフコ、ロノキワマリナキカタチナリ慶樂スルアリサマヲアラワスナリ

③「西方指南抄」上本124―2（自然物〈この場合は山川溪谷草木樹林〉が主語の例）

・シカノミナラス娑羅林ノコスエ抜提河ノ水スヘテ山川溪谷草木樹林モミナ哀傷ノイロヲアラハシキ

○「現ス」と「アラハス」とに共通しない主語

◎「現ス」のみに認められる主語―ナシ

◎「アラハス」のみに認められる主語―人間・動物

④「蜻蛉日記」104頁9行（人間が主語の例）

・後なる人々は、落ちぬばかりのぞきて、うちあらはすほどに、天下の見えぬものどもとりあげまぜて、騒ぐめり。

⑤「閑居友」126頁5行（人間が主語の例）

・心のそこをあらはしければ、この女、とばかりためらひて、なじかはさまでにわづらひたまふべき。

⑥「十訓抄」巻七35頁7行（動物が主語の例）

・「君ヲ呪咀シ奉ルモノ厭術物ヲ道ニ埋ミテ、コエサセ奉ラント構へ侍也。御運ヤムコトナクシテ、此犬ホエアラハス所也。」

右に示す用例のうち、①②③は、「現ス」と「アラハス」とに共通して認められる主語であり、それぞれ①が「神佛」②が「仏教的概念」③が「自然物」の例である。このうち①③の例は、いずれも仏教的場面で使用されており、意味も「姿や形を見えるようにする」であり、「現ス」の意味と異ならない。しかし、②の例は、仏教的場面で使用されてはいるものの、意味は「〜という意味を示す」というのであり、「現ス」の意味とは異なる。

用例④⑤⑥は、「現ス」と「アラハス」いずれか一方のみに認められる主語のうち（但し、この場合は「現ス」のみに認められる主語はない）、④⑤が「人間」⑥が「動物」の例である。このうち、④は「姿を見えるようにする」という意味であり、⑤は「自分の心の底を表出させる」という意味である。このように、同じように人間を主語にとる場合でも、その対象は「姿」のように具象的な場合もあれば、「心」のように抽象的な場合もある。このことから、「アラハス」の意味は、必ずしも可視的か否かという意義特徴によって決定されないことが分かる。これは、「現ス」と「アラハス」の意味差を考える上で、重要な要素となる。また、⑥の例は、主語が動物である点、仏教とは無関係な場面で使用されている点において、「現ス」とは異なっている。

(3)「アラハル」の主語

「アラハル」の主語を、数の多い順に示すと次のようになる。

○神佛―（神佛／佛／神／明神／本尊／観音／天照大神／菩薩／天魔／鬼王）（48）烏瑟（2）○心（心ざし／心ばへ／心くるしさ／善男の逆意／心のほど／欲怒腹立ソネミネタム心／嘘／おぼえ）（25）○仏教的概念―善根（2）佛性（2）佛の功徳（2）現業（1）諸行無常（1）盛者必衰の理（1）三毒四慢（1）佛の位（1）徳（1）経の心（1）法界に遍

する相（1）誓願（1）因果／万徳（1）念佛の一行証誠する宗（1）不生の性（1）不思議の心性（1）○自然―月（6）明星（2）牛漢（1）山（1）湖（1）石（1）海の面（1）土（1）雲雀の床（1）袖の雫（1）○隠し事（人間関係／びんなきふるまひ／事件／謀反／陰謀／御ありき）（14）○動物・植物―根（和歌中の用法）（4）桜（2）をしどり（1）霊鳩（1）鷲（1）玉がし（1）もしほ草（1）忍草（1）勁松（1）○物の怪の類―物の怪（6）怨霊（2）鏡の精（1）鞠の精（1）木霊（1）○人間―（人の姿／僧の姿／父母）（8）顔（2）○物品―たもと（2）船（2）隠れ布（1）衣の玉（1）袖（1）網代木（1）継目（1）○人間の才能、運命―人の才（2）数ならぬ身の程（1）芸能（1）後生の苦しみ（1）身の不覚（1）○しるし（神の／神佛の／寺の）（4）○文字、絵、色―文字（1）観音の霊像（1）色（1）○名―（君が名／賢者の名）（2）［○副詞的用法（「アラハレテ」の形で、「公然と」の意味で使用された例）（6）］

右のように、「アラハル」の主語のうち、数が最も多いのは「神佛」である。「神佛」を主語にとる例が最も多いことは、「現ス」と同じである。しかし、「人間」や「人間の心」を主語にとる点では、「現ス」と異なる。また、「アラハル」には、「アラハレテ」の形で副詞的に「公然と」の意味を示す用法があり、この点で「現ス」「アラハス」と異なる。そして、「アラハル」も「アラハス」と同様に、「人間の姿」「文字」「色」「物品」といった可視的な具象物を主語にとる場合と、「心」「才能」「運命」「隠し事」といった不可視的な抽象物を主語にとる場合とがある。「現ス」が可視的な具象物を主語にとることは、先述したところである。次に、「アラハル」の主語が「現ス」の主語と共通する場合と共通しない場合とに分けて、具体例を挙げて考察することとする。（ここで「アラハル」と比較するために取り上げる「現ス」は、「アラハル」と同様にヲ格をとらないものに限ることとする。）

○「現ス」と「アラハル」とに共通する主語―神佛・仏教的概念・自然物

○「現ス」と「アラハル」とに共通しない主語

◎「現ス」のみに認められる主語―ナシ

◎「アラハル」のみに認められる主語―人間・心・隠し事・動物・植物・物の怪の類・物品・才能・運命・しるし・文字・絵・色・名

①「平家物語」下192頁1行（心が主語の例）

・人のためいたはしくてなどおぼしめし、しのびてあかしくらし給ふにこそ、せめての心ざしのふかさの程もあらはれけれ。

②「狭衣物語」401頁11行（隠し事が主語の例）

・暮るゝ待つ間のおぼつかなさもわりなかるべう、また、さりとて、いつしかあらはれ出で、人にもて扱はれんも、ならはぬ御心地には、猶いかにぞや。

③「十訓抄」巻三104頁2行（芸能が主語の例）

・昔ハ雌雄ヲ決シテ芸能アラハルヽニ付テ、昇進ヲモツカウマツリシカハコソ、傍輩ロヲフサキ、世ノ人是ヲユルシキ。

右に示す用例①②③は、「アラハル」のみに認められる主語のうち、それぞれ①が「心」②が「隠し事」③が「芸能」の例である。いずれの例も、仏教とは無関係な場面で使用されたものであり、「現ス」とは用法が異なる。また、いずれの「アラハル」の主語も、不可視的抽象物であり、可視的具体物を主語にとる「現ス」とは異なっている。

（2）「現ス」「アラハス」の対象について

次に、「現ス」「アラハス」の対象を、文献ごとに表にすると表3のようになる。（「アラハル」は対象を取らないのでここでの考察からは除くこととする。）

表3　「現ス」「アラハス」の対象

①和歌・歌謡

作品	現ス	アラハス
詞花和歌集		心の月
千載和歌集		月の光
新古今和歌集		神のしるし

②物語

作品	現ス	アラハス
宇津保物語		心・御はた・金色の御かた・かくしたる手(書)
源氏物語		姿(15)・心(12)・隠し事(12)・しるし(2)・さまあしき気配・御ありさま・すきごとども・佛・隠れ家・袖の色
栄華物語	大定智悲の相・三昧月輪相・滅・生老病死	等身の佛・心・物の怪・沙羅双樹の涅槃のかた・経・龍王の家のかた
浜松中納言物語		隠し事(3)
狭衣物語		姿(5)・隠し事・心をしめ給へる折々・大方の有様

③日記・紀行

作品	現ス	アラハス
蜻蛉日記		隠し事・姿
海道記		声の虚名・恥

とはずがたり	不思議(狼籍)	供養の相手・心

④随筆

作品	現ス	アラハス
枕草子		隠し事(2)・姿
徒然草		才覚・名

⑤軍記物語

作品	現ス	アラハス
保元物語		剛憶・五十二類の悲の色・忿怒の形・前業・心
平治物語		天照大神／正八幡宮・志
覚一本平家物語	神変(2)・尾籠・九曜の形・頂上の仏面・五仏の宝冠	姿・心・名字・三身の金容・力・佛の形・親・大慈の高く峙てる・盛者必衰の理・名・密厳浄土の儀式

⑥説話

作品	現ス	アラハス
三宝絵詞(観智院本)		心(2)・霊験・善事・罪・形(3)・科・謀・四天王ノ像・願ノ文・常住ノ理・佛・燈・鷲・イハホ・威験・維摩経ノ形・像・佛ノ勝レ給ヘル事・法ノ妙ナル事・僧ノ尊キ事・湯ヲツカヘルサマ・佛ノタネ・経・佛法僧・虫ノ色・五ノ利益

宇治拾遺物語		しるし・隠し事・日吉の社の御正体・化け・嘘・埋みたる物
閑居友		佛性・きず・たえぬ思ひ・心身

⑦法語

作品	現ス	アラハス
唯心鈔(西本願寺本)	人夫ノ善悪因果ノ鹿妙	真実ノ心・善心・恥ヂガマシキ事・フカクオモハザルムネ
西方指南抄	小身(3)・勢至ノ御面像(2)・大身(1)・黄金ノ色・身量・身相・五十体・不思議	常住不変ノ相・功徳ノ相・久遠実成ノ宗・哀傷ノ色・善導ノ御心・声
一念多念文意		形(2)・慧楽スルアリサマ・信心ノヒト・アリサマノ自然ナルコト・オモフホド・易住易行ノミチ・出世ノ本懐・咨嗟ノ御チカヒ・念佛の偏き数
光言句義釈聴集記		佛法ノ源底・心の本性・此ノ菩提心ヲ種トスル事・人法無尋・義
明恵上人夢記		実ノ義
却廃忘記		身語

ここで、「現ス」「アラハス」三語の対象を、数の多い順に示すと次のようになる。

(1)「現ス」の対象

○神佛の姿―小身（3）大身（1）黄金の色（1）身量（1）九曜の形（1）五十体（1）頂上の佛面（1）○仏教的

概念―［相］大定智悲の相（1）三昧月輪相（1）身相（1）人夫の善悪因果の鹿妙（1）不思議（1）生老病死（1）○人間が行う悪事―不思議（狼籍）（1）・尾籠（1）○しるし―神変（2）○像―勢至の御面像（2）○事物―五佛の宝冠（1）

(2)「アラハス」の対象

○心（32）○人間の姿（ありさま）（31）○隠し事・恥（25）○仏教的概念―理（2）（盛者必衰の理／浄注の理）義（2）前業（1）大慈の高く峙てる（1）善事（1）佛の勝れ給へる事（1）法の妙なる事（1）僧の尊き事（1）佛法僧（1）五の利益（1）徳（1）密厳浄土の儀式（1）佛性（1）深く思はざる宗（1）久遠実成の宗（1）易住易行の道（1）恣嗟の御ちかひ（1）念佛の偏き数（1）佛法の源底（1）此の菩薩心を種とする事（1）人法無導（1）身語（1）相（1）○色・形―形（9）袖の色（1）娑羅双樹の涅槃のかた（1）龍王の家のかた（1）五十二類の悲の色（1）虫の色（1）哀傷の色（1）○神佛の姿―（佛／金色の御かた／三身の金容／佛のたね／神の御正体／）（9）○名、名字（名／虚名／名字）（6）○しるし（霊験）（5）○人間の才能（隠したる手／才覚／すきごとども）（4）○光・音―顕光（1）燈（1）音（1）声（1）○経（2）○像（2）○土に埋もれた物（2）○物の怪（1）○事物―隠れ家（1）○力（1）○罪（1）○願の文（1）○動物―鷲（1）○自然物―岩（1）○威厳（1）○狸の化け（1）○嘘（1）○傷（1）○心身（1）○勝負（1）○供養の相手（1）○佛の御はた（マヽ・宇津保物語）

さらに、各対象を「現ス」と「アラハス」とに共通するか否かという観点により、まとめると次のようになる。

○「現ス」と「アラハス」とに共通する対象―仏教的概念・神佛・しるし・像・事物

○「現ス」と「アラハス」とに共通しない対象

◎「現ス」のみに認められる対象―人間が行う悪事

◎「アラハス」のみに認められる対象―心・人間の姿・隠し事・恥・色・形・名・名字・人間の才能・光・音・経・

土に埋もれた物・物の怪・力・罪・科・誤・願の文・動物・自然物・威厳・狸の化け・嘘・傷・心身・勝負・供養の相手・佛の御はた

以上から看取される、「現ス」「アラハス」の対象の特徴をまとめると次のようになる。

① 「現ス」の対象で最も数の多いものは「仏教的概念」であり、「アラハス」の対象で最も数の多いものは「心」である。それぞれ数量的に第一位の「仏教的概念」と「心」のうち、「仏教的概念」は、「アラハス」の対象のうちの第三位に位置するが、「心」は、「現ス」の対象のなかには存しない。

② 「現ス」の対象の中には、仏教に関係しない語として「人間が行う悪事」が存するが、他は全て仏教に関係する語である。この「人間が行う悪事」が対象となる例が派生的な意味用法であろうことは、先述したところである。「現ス」の対象に対して、「アラハス」の対象は、「仏教的概念」「神佛」のように仏教に関係するものもあれば、「心」「隠し事」「名字」のように仏教と関係しないものも多くある。

③ 「現ス」の対象は、「大定智悲の相」・「大身・神変」・「像」といった可視的なものであるが、これに対して「アラハス」の対象は、「人間の姿」「色」「形」といった可視的なものもあれば、「心」「隠し事」「嘘」「音」といった不可視的なものも多く含まれている。

5、「現ス」「アラハス」「アラハル」の意味

以上、「現ス」「アラハス」「アラハル」について、文法的諸特徴の観点、「カクス」「シノブ」との比較という観点、さらには、主語と対象の観点からそれぞれ考察してきた。文法的諸特徴の観点からの考察では、ヲ格に承接するか否かという点で、「現ス」「アラハス」「アラハル」に差異が認められた。また、複合動詞形成の観点からの考察では、「現ス」に複合動詞が一例も認められないのに対して、「アラハス」「アラハル」には多くの複合動詞が認められた。そして、そ

の複合動詞の中には、「イヒアラハス」「ノベアラハス」「マウシアラハス」「アラハシマウス」「アラハシノタマフ」のように、「アラハス」が「イフ」「ノブ」「マウス」といった言語行為に関わる語と結びついた複合動詞が認められる点や、「オモヒアラハル」のように、「アラハル」が「オモフ」といった思考に関わる語と結びついた複合動詞が認められるという点を指摘した。このことは、「アラハス」「アラハル」が、単に可視的な対象のみをとる語ではないことを示しており、これらの語の意味を「現ス」と比較して考えるにあたり、注目すべき事象であることを述べた。また、「カクス」「シノブ」との比較という観点からの考察でも、「カクス」「シノブ」が「事件」「心のうち」等の不可視的な対象をとることがあり、これらの語と対義的に「アラハス」「アラハル」が使用されていることも、「アラハス」「アラハル」が、単に可視的な対象のみをとる語ではないことを示しているように思われた。また、主語と対象の観点による考察では、先に示したように、「現ス」と「アラハス」・「アラハル」との間にかなりの差異が認められた。

ここでは、これらの考察の結果を総合して、「現ス」「アラハス」「アラハル」の意味を示すこととする。

(1)「現ス」の意味

「現ス」には、先述のように自動詞的に使用される場合と、他動詞的に使用される場合とがあるので、ここでもこれを区別して考察を進めることとする。主語と対象の観点から、「現ス」の文脈的意味をまとめると次のようになる。

⑴自動詞的用法

［主語が有情物の場合・仏教と関係がある］

①神佛の姿が眼前に出てきて、見えるようになる

②人間の姿が、佛等の別の形となって眼前に出てきて、見えるようになる

［主語が無情物の場合・仏教と関係がある］

③佛や僧の力によって、仏教的概念である相・観等が形となって眼前に出てきて、見えるようになる

④佛が出現する場面において、光・宝樹等の自然物が眼前に出てきて、見えるようになる

(2)他動詞的用法

［主語が有情物、対象が無情物の場合・仏教と関係がある］

⑤佛や僧が、その力によって仏教的概念である相・観等を、見えるようにさせる

［主語が有情物、対象が無情物の場合・仏教と無関係である］

⑥人間が狼籍を働いて、それが人に知られるところとなる

右の各項目のうちの⑥を、先述したごとく派生的用法と考えると、①から⑤の文脈的意味に共通する「現ス」の意義特徴として、「有形の物として、見えるようになる（見えるようにする）」という特徴を挙げることができる。しかも、ここでの「有形の物」とは、「仏教と関係のある有情物や無情物」に限られることになる。従って、「現ス」の本義は、「仏教的有情物・無情物が、ある形となって、見えるようになる」（自動詞的用法）と「仏教的有情物が、仏教的無情物を、ある形にして、見えるようにする」（他動詞的用法）となる。

（2）「アラハス」の意味

ここで、前述の「現ス」と同じ基準によって、「アラハス」の文脈的意味をまとめると、次のようになる。但し、「アラハス」は、他動詞的用法のみであることから、ここでは、「現ス」の項目のうち(2)の他動詞的用法のみと比較することとする。

※［主語が有情物、対象が無情物の場合・仏教と関係がある］

①佛や僧が、その力によって仏教的概念である相や理等を、見えるようにする

［主語が有情物、対象が有情物の場合、仏教と関係がある］

②神佛が、自らの姿を、他の前に出して、見えるようにする

③神佛が、光や音を出して、人に知られるようにする
［主語が有情物、対象が無情物の場合・仏教と無関係である］
④人間が、隠していた心情を、表示する
⑤犬が、地中に隠れて見えないものを、地表に出して見えるようにする
⑥人間が、自分の才能を発揮し、それを他人に見せる
※［主語が有情物、対象が有情物の場合・仏教と無関係である］
⑦人間が、自らの姿を、他の前に出して、見えるようにする
⑧人間が、光や音を出して、人に知られるようにする
⑨人間が、文字を書き、文章を綴り、見えるようにする
⑩人間が、勝敗等のはっきりしないものを、明らかにする
※［主語が無情物、対象が有情物の場合・仏教と無関係である］
⑪文章中に提示された用語が、何かの意味を表示する

右に示した各項目のうち、「アラハス」に認められて「現ス」に認められない項目には、※印を付した。※印の付されていない項目のうち、［主語が有情物、対象が無情物の場合・仏教と無関係である］の項目は、「現ス」に比して用例数が多いという点で、「現ス」には認められない項目に準じて考えることもできようか。⑤のように「犬」のごとき動物が主語となる例も、「現ス」の項目には認められないものである。

各項目から看取される「現ス」との差異としては、次の二点を挙げることができる。その一つは、「アラハス」には、主語や対象の種類において、それらが仏教と関係がある場合もあれば無関係の場合もあるが、「現ス」は仏教と関係がある場合のみであるという点である。つまり、仏教と関係があるか否かということは、「アラハス」の意味とは、無関係で

あることになる。その二つは、「アラハス」には、⑪のように主語が「用語」のごとき無情物になる場合が存するが、「現ス」には主語が無情物になる例が存しないという点である。また、対象が無情物である例は「アラハス」にも「現ス」にもともに認められるが、用例数としては「アラハス」の方が「現ス」に比して極めて多い。

以上のことから、「アラハス」の本義を記述すると、「それまで不分明であった有情物・無情物を、人に知られるようにする。」ということになろう。ここで、「アラハス」の本義とした「人に知られるようにする」とは、人に知覚させることを言うのであって、必ずしも視覚的に具現させることのみを言うのではない。このことは、例えば③の項目のように、「アラハス」には、「音」という聴覚的なものが対象となる例が存し、また、⑪の項目のように、「用語の意味」という視覚とは無関係な、抽象的なものが対象となる例も存することから判ぜられる。従って、「現ス」の本義と「アラハス」の本義とで、最も区別されることは、「現ス」には、「見えるようにする」といった視覚的要素が、その意義特徴のなかに必ず含まれるのに対して、「アラハス」の意義特徴の中には、視覚的要素が必ずしも含まれてはいない点である。従って、「現ス」の本義は、「アラハス」の本義に比して、狭いと言える。

(3)「アラハル」の意味

「アラハル」の文脈的意味をまとめると、次のようになる。但し、「アラハル」は、自動詞的用法のみであることから、ここでは、「現ス」の自動詞的用法のみと比較することとする。

[主語が有情物の場合・仏教と関係がある]

①佛の姿が、眼前に出てきて見えるようになる

※[主語が有情物の場合・仏教と無関係である]

②人や物の怪等の姿が、眼前に出てきて見えるようになる

[主語が無情物の場合・仏教と関係がある]

③霊験が、佛や僧の力によって眼前に出現する
④仏教的概念である相・功徳等が佛や僧の力によって目に見えるようになる
※［主語が無情物の場合・仏教と無関係である］
⑤月・星等が出てきて、見えるようになる
⑥文字・色等が出てきて、見えるようになる
⑦隠していた心情が明らかになり、人の知るところとなる
⑧隠れ家等が、人の知るところとなる
⑨人間の能力が、他人の知るところとなる
※［副詞的用法］
⑩副詞的に「公然と」の意味で使用される

右に示した各項目のうち、「アラハル」に認められて「現ス」に認められない項目には※印を付した。

各項目から看取される「現ス」との差異としては、次の二点を挙げることができる。その一は、「現ス」は、仏教と関係のある有情物・無情物のみが主語となるのに対して、「アラハル」の主語は、仏教に関係がある有情物・無情物の場合もあれば仏教とは無関係の有情物・無情物の場合もあるという点である。つまり、「アラハル」も「アラハス」と同様に、仏教と関係があるか否かということは、その意味とは無関係であるということになる。その二は、⑪の項目のように、「アラハル」には、「アラハレテ」の形で、副詞的に「公然と」の意味で使用される用法が存するという点である。

以上のことから、「アラハル」の本義を示すと、「それまでの不分明であった有情物・無情物が、人に知られるようになる」ということになろう。また、「アラハル」の本義中に示した「有情物・無情物」も、「アラハス」の場合と同様に、それが可視的か否かという区別は認められないのであって（項目⑦の「心情」は不可視的なものである）、「現ス」の主語が、

可視的なものに限られるということと比して、差異が存する。

三、おわりに

以上、「現ス」「アラハス」「アラハル」をとりあげ、諸観点から個々の語の意味を検討してきた。その結果、これら三語の意味を弁別する特徴としては、「仏教に関係するか否か」「可視的であるか否か」という二特徴が特に重要であることが判明した。そして、三語の本義は、「現ス」が「仏教的有情物・無情物が、ある形となって、見えるようになる」と「仏教的有情物が、仏教的無情物を、ある形にして、見えるようにする」であり、「アラハス」が「有情物・無情物が、それまで不分明であったものを、人に知られるようにする。」であり、さらに「アラハル」が「それまで不分明であった有情物・無情物が、人に知られるようになる」であると結論づけた。

「現ス」の本義が、仏教と深く関わるということは、「現ス」の出自を考える上において注目せられる事象である。今後、この観点からの考察が必要となろう。また、本稿では、読み方が明らかな用例のみによって三語の意味を考察してきたが、「現ス」と「アラハス」には、例えば「現ス」を「ゲンス」と読むか「アラハス」と読むかといった表記上の問題が、尚残っている。本稿では、「現ス」「アラハス」「アラハル」について、特にそれぞれの語の意味の解明に努めてきた。このことは、更に出自や表記の問題を解明するための、重要な手掛かりとなるであろう。これらの問題を、今後の課題として、稿を終えることとする。

注

(1) 森下喜一「〈ゐる〉と〈具す〉について」(『野洲国文学』10　昭和四七年九月)
岩下裕一「〈念ず〉の多義性について」(『国学院雑誌』78―11　昭和五三年一一月)
岩下裕一「〈信ず〉の展開―語義から見て」(『昭和学院短大紀要』16　昭和五五年三月)
藤原浩史「漢語サ変動詞〈具ス〉の和化過程」(『国語学研究』27　昭和六二年一二月)

藤原浩史「漢語サ変動詞〈怨ず〉の意味と表現価値」（『国語学研究』28　昭和六三年一二月）
藤原浩史「漢語サ変動詞『念ず』の表現価値」（『国語学研究』30　平成二年一二月）

（2）拙稿「平安・鎌倉時代に於ける『念ス』の意味・用法――オモフと比較して――」（『国文学攷』第129号　平成三年三月）拙稿「平安・鎌倉時代に於ける「誦ス」の意味用法」（『広島女学院大学日本文学』第3号、平成五年七月）

（3）岩下裕一「『現ズ・アラハス・アラハル』――『今昔物語集』より――」（『昭和学院短期大学紀要』53号　一九八八年）

（4）読みが不明な場合としては、例えば、「現ス」と表記されているものを、漢語サ変動詞として「ゲンズ」と読むか、和語動詞として「アラハス」と読むかが、一見しただけでは判断し難いといった場合を挙げることができる。この他に、「現シ」（連用形）「現セリ」（命令形＋完了の助動詞）のような場合や、「現」「現テ」のように送り仮名の付されていない場合が有る。

（5）國廣哲彌氏は、「意味論の方法」（昭和57年　大修館書店）の中で、「主語、目的語にそれぞれ認められた特徴は動詞の意義特徴の一部を構成し得ることになる。」（204頁）と説かれる。

［検索資料一覧］

古今和歌集、後撰和歌集、拾遺和歌集、後拾遺和歌集、金葉和歌集、詞花和歌集、千載和歌集、新古今和歌集―「新編国歌大観」（角川書店）　梁塵秘抄、竹取物語、伊勢物語、大和物語、平中物語、落窪物語、浜松中納言物語、狭衣物語、堤中納言物語、土左日記、更級日記、紫式部日記、徒然草、方丈記、今昔物語集、宇治拾遺物語―「日本古典文学大系」（岩波書店）　源氏物語―「源氏物語大成」　栄華物語―「梅沢本栄華物語　本文と索引」（高知大学人文学部国語史研究会編）　うたたね―「うたゝね　本文および総索引」（次田香澄、酒井憲二編　笠間書院）　海道記―「海道記　総索引」（鈴木一彦、猿田知之、中山緑朗編　明治書院）　東関紀行―「東関紀行　本文及び総索引」（江口正弘監修　笠間書院）　たまきはる　―「たまきはる（健御前の記）総索引」（鈴木一彦、鈴木雅子編　明治書院）　十六夜日記―「十六夜日記　校本及び総索引」（江口正弘編　笠間書院）　とはずがたり―「とはずがたり総索引」（辻村敏樹編　笠間書院）　枕草子―「校本枕冊子」　観智院本三宝絵詞―「三宝絵詞」（勉誠社　影印）　古本説話集―「古本説話集」（勉誠社　影印）　閑居友―「閑居友本文及び総索引」（峰岸明、王朝文学研究会　笠間書院）　唯信抄、西方指南抄、一念多念文意―「親鸞聖人真蹟集成」　光言句義釈聴集記―「明恵上人資料　第二」（東京大学出版会）

［付記］　本稿は、平成五年度鎌倉時代語研究会夏季研究集会での口頭発表を基に、補筆して成稿としたものである。研究集会においては、小林芳規先生をはじめ、諸先生方に有益な御教示を賜った。ここに記して、心より深謝申し上げる次第である。